

蜂起—戦争勝利政治集会基調報告

文責 森 恒夫

△掲載にあたっての編集部註▽
避けて通ることはい

1972年春以降に於ける日本の革命勢力内部には、ひとつの混乱の様相が呈されてある。△連合赤軍▽の、いわゆるリンチ・粛清以降、すでに半年以上の時の経過を見たとはいえ、—それが、われわれの内包していた、あるいは外在していた矛盾を根底から露呈させたが故にか、いまだ総体としての混乱から脱しきれていないように見える。彼らの戦いは、われわれの前に肯定的にも否定的にもあま

りにも巨大な、そして重要な(ノ)問題を投げかけてくれた。

われわれはこの問題を避けて通ってしまうことはできないだろうし、誤りだと全てを切り捨ててしまうことも無責任にすぎる。彼らが今、権力の手に奪われ、全ての情報が権力(＝ブルジョア・マスコミ)に左右されている状況に於いて、全人民の課題、われわれ自身の問題として追求する必要があるのでないだろうか。

様々な論評、様々な批判、また権力によるキャンペーン、デマゴギーが流布されているが、彼ら自身の主張、△連合

赤軍▽はどのような政治主張をしていたのか等々、明らかにされていない部分が多い。——たとえば、ひとつの重大な問題に論究をはじめようとする時、決定的な戦いの、ひとつの総括作業を開始しようとする時、避けては通ることのできない重要な△環▽が存在する。——△連合赤軍▽について考えるとき、この△赤軍特別号▽蜂起—戦争勝利政治集会基調報告▽は、そのようなものとして、われわれの前に存在している。

以下、少しばかりのこのパンフ△赤軍特別号▽にかかわる具体的事実を記しておかねばならない。

△赤軍特別号▽と題された、このパンフレット「蜂起—戦争勝利政治集会基調報告」は、1971年1月25日、「蜂起—戦争勝利」政治集会に於いて、パンフ「赤軍」特別号として発表された。会場に於いての限られた部数、限られた人々の手にしか渡らなかつた。また、発表後、すみやかに回収の処分がなされたとも伝え聞く。

時間的経緯としては、70年11月26日パンフ「赤軍」7号発行後、71年3月5日新聞「赤軍」8号(リーフレット形式で出されている。)との中間点に位置している。以後、パンフ「赤軍」・新聞「赤軍」ともに休刊、71年7月の「銃火」にひきつがれていく。文責は、森恒夫氏。印刷形式はガリ版刷り。

—なお、長らく原文所在不明のため掲載が遅れたことを、お詫びするとともに、原文判読不能の部分が若干、残ったことについてもお詫びしておかねばならない。……いくらかなりとも論争の、総括の一助になることを期待する。

△赤軍特別号▽

蜂起—戦争勝利政治集会基調報告

文責 森恒夫

全国の同志諸君、プロレタリア兄弟諸君、獄中で闘う同志諸君、苦斗の70年が終りを告げ、今、我々は素晴らしい71年を迎えようとしている。60年代後半の世界的大会戦に敗北し、とりわけその戦略的高地をめぐる69年「安保決戦」に完敗したプロレタリア人民の闘いは、70年の文字通りの苦闘を通して、鍛えられ、練りあげられて、71〜72年帝国主義の再度の進攻に対する壮大な「革命戦争」を準備してきた。アジアにおける「労働者国家」武装プロレタリアートの臨戦体制確立と日米での我々、京浜安保共斗(日本共産党革命左派)やB・P・P・W・Mの闘い、中近東—中南米—スペインにまで及ぶ革命戦争派の闘いがそれである。我々は「前段階蜂起→世界革命戦争の攻勢へ」路線ゆえに70年の苦闘を本質的に、根底的に

切開し、自らを变革しなければならなかった。が故に機関紙「赤軍No.6、7」に引続いて、わが党の1年有余の闘いの総括を行い、71年を迎える「路線」の提起を行いたい。

(1) 党の為の闘いの前進

69年の敗北から、70年の前進に向けて確立した「70年秋期前段階蜂起」路線をめぐって、我が党の1年有余の闘いは、「党の為の闘い」に集中された。いうまでもなく「前段階蜂起」路線は、60年代後半の先進国の連統暴力斗争、中国の文化大革命、後進国革命斗争の三ブロック階級斗争が、世界プロ独に向けての統合された革命斗争に自然発生的にであれ昂まり、発展していった「世界的大会戦」の中で、67年10・8〜68年防衛斗争と首相官邸斗争を継承し、発展させるものとして提起された。この事は「世界大会戦」への突入が要求した党の世界化、三ブロック階級斗争の戦略的統合と、軍事化、共産主義化に応え、先進国における連統的大衆的暴力斗争を戦略的に追い詰めた帝国主義権力に対して、戦略的攻防関係を一変させ得るような決戦を提起したという事であり、それ故「恒常的武装斗争」なる戦略的転換を準備する斗争一般で「環」を否定した日和見主義、敗北主義を粉碎しなければならなかった故である。この「前段階蜂起」は世界革命斗争における全体的な発展過程―戦略問題における核心を、三ブロック武

はじめて自らの自然成長性、経験主義と闘うことができるということである。ところで、かかる根底的総括は、当然、敵・帝国主義ブルとの攻防関係、主客の關係の中で行われねばならず、かつ味方内部の矛盾の止揚として展開されなければならない。我々の限界は自然発生的で、経験的にではあれ、60年代世界革命斗争の昂まりを、いち早くとらえ、三ブロックを越えた戦略的統合を目指し、かつその永続的發展を提起した優位性にもかかわらず、自らの自然発生性、経験主義と闘う武器をかちとっていなかった事、それ故「戦略なき戦術主義」「党建設なき戦術主義」として厳しく総括されねばならない限界であった。すでに前号で述べた如く、我々は従来「過渡期世界」の階級斗争を、世界革命斗争として展開してきた1917年以降の共産主義運動をコミンテルン内部で唯一「主動権」を維持しつつつて革命斗争に勝利した中国共産党の闘いの総括の中から、また反革命、侵略軍と国内―国外で闘ったロシア・ボルシェヴィキの総括の中から、帝国主義打倒―社会主義建設を獲得する革命斗争、軍事―政治―建設の一体的組織化、かつそれに向けた党―軍―革命戦線への全人民の組織化を内包した持久戦としての革命斗争―戦争を消滅させる戦争を内包し、外には侵略、抑圧、反革命として、内には「なし崩しファシズム権力再編・強化」として展開する帝国主義段階の闘いとして明らかにしてきた。この革命斗争は歴

装プロの永続的な主動権の確保―「国際武装根拠地」建設へ発展させた。いかえれば当初、戦略的世界革命斗争を闘い抜くにはこのような提起のみでは明らかに不充分であった。これは戦略問題の一部であり、全てではない。また、70年前段階蜂起は、69年前蜂を論理化普遍化し、先進国連統決戦、攻勢戦から世界的、戦略的反攻の「速勝戦」論を生み、国際根拠地建設は世界的、戦略的持久戦幻想を不可避に生み出す。現実的には、69年先進国蜂起を闘わんとした先進国革命派と、現に一国的、ないし大陸的持久戦を闘っている左派の総体を統合し、止揚する戦略が要求されており、このブロック毎の革命の成熟が、我々も含めて明らかに自然成長的であり、経験的であったが故、より一層、単なる発展ではない―統合、止揚が問われたのである。我々は、何故、自然成長的であり、経験的であったか―それは、我々の生成―赤軍派の誕生そのものが「環」としての戦術をめぐって存在した事、歴史的な日本の反スタ共産主義運動―トロッキズムの伝統の下に、「世界プロ独」を目標とする戦略―戦術論に止っていた事、いかにすれば、現に自国帝国主義―世界帝国主義打倒と社会主義を同時一体的に獲得しつつある「過渡期世界」の階級斗争―世界革命斗争の戦略問題を獲得するには、我々自身の生成―発展を含めた世界共産主義運動の歴史的、論理的な根底的総括―共産主義論―戦略―戦術の獲得によって、

史的には貧民の闘い↓労働組合、政治斗争↓ソビエト、蜂起の時代の中で、資本制生産の発展によってブルジョワジーに附与された組織性、攻撃性をマルクス・レーニンの指導の下に発揮し、侵略―抑圧の帝国主義強盗斗争に対するソビエト―蜂起による攻勢↓侵略、抑圧、反革命斗争の帝国主義の攻勢に対する党―軍―戦線、世界的戦略的持久戦として、戦略的反攻を準備しつつある革命斗争である。ところで、我々は、かかる革命斗争の措定から、我々の党建設の核心が我々自身を含めた世界的党派斗争の内実を明らかにする事にあること、それがそれが戦略的反攻を準備しつつある世界革命斗争に背骨を与えるものである事を見なければならぬ。前述した自然発生性、経験主義との闘いは、侵略―抑圧―反革命斗争、なし崩しファシズム再編に対して「平和共存」「議会主義への道―平和革命」をもつてその陣営に包摂され尽くした現代の中央派、スターリン主義と帝国主義的労働運動で帝国主義の軍事外交支持、産―軍体制確立へ進む右派、社民との党派斗争の中で「左派」の統合、止揚として展開されなければならないのである。「左派」内部にはロシア・ボルシェヴィキの飛躍をめぐるレーニン主義の分解、スターリニズム、トロッキズムを基盤としつつ、それを内在的に克服しつつある「左翼スターリニズム」と「反スタ共産主義」派が存在し、双方共に自らの自然発生性、経験主義を止揚しきれていない。我々は

70年の苦斗の成果を第一に党の為の斗いの前進とし、自らの「反帝反スタ・トロッキズム」の限界を世界共産主義運動の第四段階の到達、世界革命戦争の戦略的反攻に向けてた党—軍—戦線陣型の世界的構築の措定から世界的左派の統合—止揚（組織戦術としての統一戦線、党派斗争）として、我々自身の党的立脚点を明らかにした事におかねばならない。更に附加するならば、我々は「戦争を消滅する戦争」を行う中で、政治工作—軍事行動—建設を一体的に行い得る陣型を構築しなければならず、我々の綱領的立場、世界革命戦争を支える「共産主義論」は戦略的、世界的過程の現実的な終了までは、党员、軍隊員、革命戦線同志の規律として実践的にかちとられてゆかねばならない。国家、民族、ブロックを起えて、全ての力を世界革命戦争勝利へ注ぎ、全てのプロレタリア人民を組織し、犠牲的、英雄的に敵をせん滅し、あらゆる場でプロレタリア的秩序、規律を作りあげてゆく事、これら全てが党規律、軍規律として、さらには「共産主義者のモラル」として形成される事が、党建設の基軸である。また画期的な日・J斗争は軍事境界線としての国境を突破し、党派斗争—党建設の世界的展開を切り開いたことで、我々の党の為の斗いの決定的な勝利であった。この斗いは、国際主義と英雄主義に関する素晴らしい問題を組織内部にもたらし、真の党的規律の実践として、文字通り模範を示したのである。さらに第二に確認し

ておかねばならないことは世界革命戦争を戦略的持久戦の斗いとして措定した事である。我々の限界が「戦略なき戦術主義」であり、何よりも世界革命戦争の戦略—戦術を明らかにすることから出発しなければならなかったたのであり「持久戦」の措定は戦争の目的、主客の關係、發展過程の総体、いわば戦略問題の中心を明らかにしたものである。第三に一年有余の組織戦の勝利である。政治—治安警察との斗い貫徹し、議長をはじめ、多くの同志達を獄に奪われながら、我々は党—軍—革命戦線の陣型構築を基本的にかちとってきた。「よど号」9名の同志と獄中同志の建斗が、あるいはアジア革命戦争の前進が不断に我々をイデオロギー主義への転落から救い、新たな党規—軍規の下に党—軍を確立し、また革命戦線の全ゆる戦線への拡大、軍事化の促進によって、非合法党—陣型を確立してきたのである。非公然、公然活動領域の拡大は党—軍—革命戦線の集中した組織性によってはじめてかちとられたのであり、とりわけ革命戦線全国体制、非公然活動の獲得は大きな組織的前進をわが党にもたらした。これら組織戦の勝利は、世界革命戦争戦略の獲得を内実化し、党派斗争の前進と共に、党建設の開始をもたらしたのである。かくて、我々は70年の党の為の斗いを中心に「戦略なき戦術主義」「党建設なき戦術主義」を克服し、「世界革命戦争戦略」「世界革命戦争の党建設」を獲得してきたことを総括した。路線転

換の基本点を押さえて、70年世界革命戦争の総括に入る。

(2) 70年世界革命戦争総括

60年代後半の世界的大会戦に於いて、先進国の連続的な権力斗争の波を撃破した帝国主義ブルジョアジーは、米帝国主義を支柱とする密集反革命体制の一時的後退を余儀なくされている。ベトナム革命戦争は依然として英雄的に斗われ、プノンペン包囲、ベトナム各地の革命委員会の成立、象徴的な米軍特殊部隊陣地の敗北—放棄、等、カンボジア反革命戦争の開始の口火を切った米帝は「攻勢的防衛」を主張するペンタゴンの主張通り局面を開くことはできなかつた。72年に向けた「ベトナム化政策」米軍撤退と南ベトナム政府軍の肩代りは、まさしく「防ギョ」の局面を物語っていたのであり、カンボジアへの戦火の拡大、聖域への進軍、北爆再開、珍奇な「捕虜奪還作戦」はいくらか「攻撃型防禦」を強弁しようとも米帝の60年代後半、それに密集した反革命体制の後退を露呈した。オーストラリア、ニュージーランド等、参戦国の撤兵、タイ、韓国の造反は、朝鮮反革命戦争時の「遅滞戦術」（土地を失って時間かせぎ反攻を準備した）すらとり得ない米帝の姿を浮き彫りにし、永続的な侵略、抑圧、反革命戦争の展開なし崩しファシズム再編、強化を基軸とした米帝の転落、米—

ソ、ヤルタ体制の解体を押し進めた。軍事体制の下、永続的な軍事スパンディングをメカニズムとする現代帝国主義は、慢性的な資本の過剰—国際信用機構のなし崩し的解体—なし崩しブロック化は先進国間水平分業体制を解体させ、必然的に国際的統制経済化—保護主義を抬頭させる。侵略—抑圧—反革命の展開、国内なし崩しファシズム再編の永続的な階級矛盾の蓄積は、かかる現代帝国主義の経済的危機の引き延し—経済的、社会的矛盾をもたらし、侵略、抑圧、反革命の不統一を拡大するものである。米帝の一時的後退—再編は反革命同盟内部のヘゲモニー再編、ブロック化競争を伴いつつ、かかる危機を拡大し、龐大な失業の群れ、軍内規律の低下、等をもたらしている。米国内のプロレタリア人民は「星条旗への忠誠」を疑い、捨て去り、ニクソンは撤兵—内政—拡大財政を余儀なくされており、英雄的な北ベトナム労働党の指導の下に、ベトナム—ラオス—カンボジア、さらに、中国—朝鮮人民の武装した革命戦線はインドシナ全域に於て「機動戦—遊撃戦」の段階から、戦局を除々に陣地戦—白色地帯での政治工作に展開させ、米軍撤兵—反攻の準備を進めており、米帝は日本帝国主義のアジア反革命軍確立—「内政での勝利」を媒介にして再度の進攻を展望する以外に道はない。イタリア、カナダ、あるいは中南米—チリの中国承認問題。西独—ソ連、ポーランド条約による欧州ヤルタ体制の分解、NATOの再編—米帝

の軍事外交の敗北―後退の年だった。かかる米帝の後退に對して日本帝國主義はどうなのか。H・J、援助、国籍問題等、龐大な資本輸出による韓國經濟の掌握―前進基地化、71年朴三選以後の「大陸進攻」を基軸とするアジア反革命前線統合の要として、日（沖繩）―韓―台を再編しようとする日帝は、本格的な戰略的攻勢を目前にしてアジア陣営内の矛盾、国内権力再編をかかえている。米の後退、ヤルタ体制の根本的な再編の中で、「中国承認」とするわけにはゆかず、かつアジアブロック諸国からの反日M、米帝との經濟対立―纖維保護主義による後進国市場への資本輸出の増大、国内支配体制の再編―農業、労働Mの再編、公害斗争、等をかかえた日本帝國主義は71年への展望を独占ブルの「日米關係の改善、開發諸國援助、資源確保」として設定した。だが、何よりも70年に沖繩前進基地化―70年の自衛隊六千名駐屯と、国内米軍基地から在日米軍撤退、第四次防を基軸とする侵略―抑圧―反革命軍隊確立の骨格を確得した日帝にとって「米帝撤退、ソ連、中国の伸長」（外務省）という70年の危機感を解決するには、産業体制の再編―金融界を含めた三大財閥への集中、合併の促進による密集した軍需独占体制の確立と組織破法―自衛隊の治安―政治―軍事スタッフによる非常時体制の準備、また民間大労組を中心とした労働Mの帝國主義的再編の終了等貫徹し、アジア反革命前線の司令部、軍需工場、

を通して、三ブロック階級斗争を世界的に、戰略的に統合しようとしたレーニンが、ネップ・マン―國家資本主義論争を経て、「協同組合について」でかかる世界的、戰略的統合の内実を部分的に明らかにし、独に於ける決戦―蜂起を持久的に準備しようとした事、ボルシェビキの党の革命の中途挫折によって準備された。スターリンは、このレーニン戰略を現象的に引き継ぎ、ロシア・ソビエト社会主義建設の困難―民族性へ拝跪したネップ・マンを統合し、レーニン戰略に基く独決戦―世界的速決戦を主張するトロツキ―に勝利した。かかる過程で、部分的にはあれ提起されかつ、党の革命を中心に実践されていたレーニン主義―世界的、戰略的三ブロック階級斗争の内実の提起は、ことごとくスターリンの手によって歪曲され捨てさられた。第二次大戦前の世界プロレタリア人民の前進に對して、その自然發生的な「帝國主義戦争阻止」の闘いを、人民戦線戰術を中心とする権力斗争抜き平坂板板各国革命の型論におきかえ、独ファシズムの侵略―抑圧―反革命戦争の拡大に對して、英―仏帝の「日和見主義」を批判するのみの客観主義に止ったのである。できるかぎり戦争を避け、巻き込まれないようにしようとするスターリンにとって、独ナチのソ連進攻は驚くべきことだった。従って、大祖国防衛戦争は17年後の革命戦争―国内戦のごとく、決して敵を引き込み叩く攻勢的な積極防禦戦ではなく、文字通り「戰略的陣地戦」

基地としての位置を確保することにある。かかる展望の下に、民社、公明を含めた対中国問題の引き延し、欺瞞的な「内政の年」の主張、後進國援助を展開し、ひたすら時間をかせぎつつ戰略的攻勢に備えているのが日帝の現状である。かくて、日帝のこの戰略的攻勢は、米帝主義の「攻勢的防禦」による一時的後退と同時一体的に進行し、かつまた歐洲に於けるスタ主義ソ連と西独帝との相互の陣地戦への防禦体制確立と機を一つにして、60年代世界帝國主義の米帝―ベトナム戦争―各國参戦―密集反革命体制の解体以後、最も大規模な組織だった帝國主義の攻勢として準備されているのである。他方、70年に於けるソ連修正主義の動向は、国内での第×次スターリン体制、即ちフルシチョフ後の集團指導体制から、ブレジネフ書記長体制確立をはかり、中央統制經濟―肅×の下に「祖国防衛戦争」を準備しつつある。この大祖国防衛戦争は第二次大戦におけるスターリンの有名な提起以降、一貫して帝國主義の根本路線をなしてきた。衆知の如くロシア・ボルシェヴィキとコミンテルンに於けるスターリンの勝利は、17年蜂起―権力奪取以後、独革命への赤軍の進軍、國際反革命軍との歐洲革命戦争を中心としたロシア―世界速決戦が敗北する過程で、ロシアの社会主義建設、赤軍建設、先進國に於ける統一戦線戰術、即ち社会民主主義派からのプロ多数派の獲得、後進國でのブルからの民族解放斗争へゲモニーの奪還、共産党樹立

による戦争なのである。第二次大戦時の祖国防衛戦争が、今や東歐、「労働者國家」群を含めた大陣地戦に変わっただけで、西独との不可侵条約、中近東、アジア、中南米へのヘゲモニー拡大、地中海―インド洋艦隊によるユーラシア大陸の包圍等、ソ連の消極的防禦による陣地戦は着々と進展している。米―ソの平和共存がなし崩し的に解体し、わずかにその限界的協調關係がSALTで行われ、キューバの潜水艦基地をめぐる取り引き等、の中で、この反革命的陣地戦は、その内部にポーランドの自然發生的な大衆暴動、東独の強固な対西独条約への反対、ソ連のインテリゲンチヤ地下運動等をはらみながら、ワルシャワ常備軍建設―コメコン改編をなし切れていない。我々は帝國主義の戰略的攻勢が70年代初頭に準備されつつある中で、かかるソ連反革命陣地戦―大祖国防衛戦争を根底から解体し、世界党―赤軍―革命戦線の陣型に再編していかねばならない。こうした帝國主義、修正主義の動向に對して、中国、北ベトナム等の「労働者國家左派」―左翼スターリニストはどうなのか。また、先進國のプロレタリアートの闘いはどう前進したのか、プロレタリア文化大革命の基本的な勝利を達成した中国は、全国人民代表大會へ向けて、「社会のみならずみまでのプロ独」を実現しつつある。インドシナ革命戦争に對する「偉大な後方」宣言、米帝との戦争への準備憲法改正等、一部に對ソ連速決戦をめぐる論争を展開しつ

つ、中国は基本的な路線を世界革命戦争—根拠地建設に設定した。この事は、レーニンの指導したソビエト・ロシアのプロ独—社会主義建設を進展させた、世界プロ人民の歴史的前進である、と同時に、未だ世界革命戦争の戦略問題、共産主義論が経験的、それ故、自然発生的にしか措置されきてない限界、とりわけ、スターリン主義（哲学教程、経済教程、レーニン主義の基礎、等に論理化されたマルクス主義の修正）の論理的、歴史的総括を行いきれていない限界と、一国的持久戦から、地方的、大陸の持久戦の段階に、その戦略が止まっている事をみておかなければならない。土地革命戦争から抗日、解放戦争に至る過程で提起された偉大な「戦争・戦略問題」が連合政府論—新民主主義論を経て、朝鮮革命戦争と、党—軍—整風運動—プロレタリア文化大革命へ発展される中で、かかる経験—実践の論理的な総括は、マルクス・レーニン・スターリン主義との関係で、はっきり共産主義論、戦略論（世界）として措定されねばならなかった。が、この事はプロ文革の歴史の意義を決して低めたり、一国的であれ、毛沢東の戦争—戦略問題の意義を失うことにはもちろんならない。我々は現に進展している中国のプロ独—社会主義運動、世界革命戦争の根拠地国家化と結合し、止揚していかなければならないのである、北ベトナムの臨戦体制、朝鮮人民民主主義共和国の党大会と韓国での暴力革命、合流路線の提起等、総じてアジア

大陸全域への持久性の拡大、前線—インドシナでの反攻の準備の前進を確認しておかねばならない。他方、労働者国家を根拠地とするかかるアジア革命戦争以外の地域では70年の事態を最も鮮明に示す三つの斗いがあった。それは、第一に、我々のH・J斗争であり、第二に、中近東革命戦争—PFLPのスカイ・ジャックであり、第三には米BPPの黒人憲法会議である。これら三つの斗いは、中南米の都市ゲリラ—同志奪還作戦や、カナダFLQの斗い、スペイン・バスクの斗いをまき起し、世界的に対峙段階に入った革命戦争に多くの教訓をもたらした。我々のH・Jは、すでに幾度も確認した如く、60年代世界の大戦に於いて先進国蜂起から、世界革命戦争の永続性の確保—いかにすれば、戦略的世界的なプロレタリアートの主導権を確立する事—国際武装根拠地獲得であり、その後のインドシナ革命戦争、統一戦線による北ベトナム、中国、北朝鮮の根拠地国家化、ベルトの確立としてもたらされ、かつまたアジアの一国的、ないし大陸的革命戦争と、先進国の分離を統合、止揚しようとするものであった。我々は、かかる60年代を引き継ぐ提起を行いつつも、70年代を党の為の斗い、建党—建軍期として位置づけ、速決戦ではなく、持久戦の為の準備を行なわなければならなかった事はすでに述べた通りである。中近東革命戦争を巻き起したPFLPの斗いは、単なる同志の奪還戦ではない。イスラエル反革命

に対する反攻をかちとる為に、前線基地ヨルダンを文字通りのプロレタリア陣地として獲得する反攻の前段階的斗いであった。結果は、米帝の介入—ソ連修正主義—ア連合の日和見主義によって、ヨルダン内の基地を痛打され、屈辱的な停戦協定を受け入れざるを得なくなったのであり、また、アルファタ、PFLP、DPFLP、サイカ主要4ゲリラ組織の政治的、軍事的、財政的統合問題に迄発展したのである。この事から、我々は反攻の準備が、軍事戦術を中心とした戦術的攻勢のみではなく、組織戦術を通じた味方内部の統一、矛盾の止揚、より大きくはアラブ—アジアを含めた世界的、戦略的反攻の計画された戦術へ昂められねばならない事を知った。PLOの再編、統合問題が何故崩壊したか、現在の我々には明らかではない。が、PFLPの革命的な斗いと、中近東コマンドーの英雄的な斗いは、シリアのクーデター、ナセルの死とアラブ連合、リビア、スーダンの統合問題、それへのソ連修正主義の介入によっても決して終ることのないものである事は明らかである。アメリカに於けるBPPの斗いは、クリバー—国防相の朝鮮人民民主主義共和国訪問、アルジェリア支部開設、「世界解放戦線」の提起にみられる三ブロック階級斗争の戦略的統合、分派斗争から導かれた党の世界化を基調としつつ、「憲法会議」を設定しCIA、FBI、等の熾烈な弾圧に、虐

殺の日常化に迄、進展しているが、このBPPの「国際路線」と戦術的政治斗争の重視は、軍事戦術の位置が不明確な事、米帝内斗争の世界戦略内での確定等の問題を持ちつつも、対峙—戦略的反攻を準備する斗いを基調として、みておかねばならない。かかる三つの斗いと、それを引き継ぎ展開された一連の都市ゲリラ、ないし奪還斗争は、明らかに帝国主義の70年初頭に向けた戦略的攻勢の前段、ソ連修正主義の大陣地戦に対する自然発生的な世界的持久戦の昂まりを示しており、アジア革命戦争—先進国革命戦争の戦略的呼応、統合が未だなされていない段階で、各国的、戦術的、従って即自的攻勢として展開された。総じて70年代世界革命戦争は、帝国主義、とりわけ、米帝国—日帝による72年を環とした戦略的攻勢の準備、前段とソ連主義の東欧ブロックを含めた防禦的陣地戦—大祖国防衛戦争の準備であり、他方、中国、北ベトナム、北朝鮮を中心とする大陸持久戦陣型—根拠地国家化と、先進国、中進国、プロレタリア人民の戦術的戦斗と戦術的統合への前進の過程であった。従って、我々は戦略的反攻を準備する対峙段階の斗いの環を、71年—72年、米—日帝の戦略的攻勢の要となつている日本帝国主義の沖繩前進基地化に設定し70年代の世界革命戦争総体の発展過程の中にそれを正しく位置づけ、建党—建軍の斗いから、軍事—組織戦術を媒介に、沖繩斗争を蜂起に領導し抜いていかなければならない。かかる観

点から、次に世界革命戦争の戦略問題、戦術問題、その連関を明らかにし、前号（No 7）で我々が未だかかえていた主客の攻防関係を抜きにした主観主義—軍事的にはゲリラ主義的な傾向、戦略なき戦術主義を自己批判的に解明しよう。

(3) 世界革命戦争の戦略問題

世界革命戦争の戦略問題とは、資本制社会における階級斗争の最も総合的な問題であり、「戦争を消滅させる戦争」共産主義社会を建設する戦争の全体的な発展過程の問題である。プロレタリア革命斗争は、その誕生以来、資本制生産様式の発展に伴って、受動的に敵—ブルジョワジーから与えられた組織性、攻撃性を組織し、目的意識的に敵を攻撃してきた。マルクスが明らかにした産業資本主義段階に於ける階級斗争は、その前段の資本主義社会確立期の貧民、第3身分の斗い、プロレタリアートが組織をもたず、機械打ちこわしや一揆を無政府的にしか斗い得なかった時代から、「労働組合」への組織化、経済斗争から民主主義斗争、政治斗争への発展を獲得し、「戦争と民族問題」、植民地主義に対してプロレタリアートの武装—独裁、コミューン建設の攻勢的斗いを展開した。が、産業資本主義段階から古典的帝国主義段階への発展は、金融寡頭制から労働貴族を生み出し、民族主義、社会排外主義へのプロレタリアートの

包摂を経て帝国主義強盗戦争へ発展した。レーニンは1905年革命の過程から、すでに生産点における経済斗争—権力斗争—蜂起への道、いわばロシア一国における戦略—戦術を設定し、攻勢的階級斗争を領導した。また第一次帝国主義戦争に対しては、第三インター—帝国主義戦争を内乱へ、そして17年蜂起—権力奪取を行い、前述したソビエト—ロシア、独を中心としたヨーロッパ先進国、後進国の三ブロック階級斗争の統合—世界戦略を打ち出した。が、独敗戦—ロシア革命によって惹き起された世界プロレタリア人民の斗いはすでにロシア反革命戦争—ベルサイユ体制として戦後世界の再編を、即ち戦略的攻勢を準備した帝国主義に対し、各国速決戦のまま統合されきれず後退した。レーニン主義は、その生成—発展を規制した古典帝国主義の現代帝国主義への推展、反革命攻勢と米帝を中軸とする体制再編に対して、萌芽的に発展され、ロシア赤軍建設、プロフィンテルン（世界労働組合連合）建設、そして文化革命のソビエト—ロシアにおける貫徹として提起されつつ、中途挫折し、スターリン主義—トロッキズムへ分解した。かくて、第一次帝国主義戦争後、戦略的反攻を準備できず、かつ独における戦術的攻勢—決戦にも敗退した世界革命戦争は、防禦段階に止まり、スターリン主義のソビエト—ロシアに於ける階級斗争の否定、防禦的陣地戦の教条化によって発展されることのないまま、30年代

—第2次帝国主義戦争を迎えた。唯一第一次大戦後の世界革命戦争を堅持し、一国的であれ多くの発展をもたらしたのは、言うまでもなく毛沢東の指導する中国革命戦争である。毛は、中国革命戦争—勝利の過程で、革命戦争が敵を消滅させ、戦争を消滅させる事であることを明らかにした。また、半植民地、中国の戦争の長期性、残酷性、帝国主義の進攻の矛盾の中に、共産党—赤軍—戦線の組織性による全人民の組織化と戦争に於ける「主導権」の永続的な確保を中心に、持久戦を提起した。戦略的持久の中での戦術的速決、戦術的防衛の中での戦術的攻勢、運動戦と遊撃戦、とりわけ遊撃戦の戦略的位置付け重視は、解放戦争未明における「全ての軍を工作隊へ」、あるいは初期以降、全ゆる地域で地方赤衛隊—遊撃隊が、全人民を組織しており、戦争を展開しつつ、建設（生産の組織化、プロレタリア的秩序の確立）を行っていた事から、世界革命戦争の普遍的問題としてみなければならぬ諸点を提起した。レーニンが「社会主義革命の前夜」として、帝国主義の発展段階を位置付けたのに対し、我々が従来、過渡期世界として述べてきたのは「世界革命戦争を内包した帝国主義」段階に他ならない。そして、世界革命戦争とは、帝国主義の永続的な侵略、抑圧、反革命戦争の進攻と、その心臓部でのなし崩しファシズム攻勢—陣地戦に対して、世界党—世界赤軍の下に全プロレタリアを戦争—社会主義建設に組織する陣型

構築の斗いを中心に、戦略的には防禦でありながら戦術的に不断に攻勢—勝利をかちとり、主導権を獲得していく斗い—従って、持久戦として斗われなければならない。持久戦を単なる長期戦の意味で考えるのは、全く愚な事である。現に世界革命戦争を内包した帝国主義段階に我々の階級斗争がある事、が、その革命戦争は、ロシア革命以降、戦略的防禦の段階に止まり、60年代後半の世界的大会戦を経て、アジア革命戦争と先進国連続権力斗争によって、即自的であれ、対峙段階に入りつつある事、何故、未だ即自的であるかは、中国—北ベトナムを中心とする一国的持久戦陣型の確立と、帝国主義心臓部でのなし崩しファシズム権力再編、強化に対する戦術的攻勢の斗いが、全世界的な党—軍—戦線の陣型の下に戦術的に統合されていない事、をふまえて戦術的反攻を準備する戦術—戦術問題を考えなければならぬ。共産主義建設は、かかる戦術—戦術の内部に、プロレタリア的規律として確立され、実践され、戦略的反攻—帝国主義ブルジョワジーに対する追討戦の中で現実化されるのである。で、我々は戦略問題の基軸を「持久戦」として設定したが、この持久戦は、敵—帝国主義の侵略—反革命—抑圧戦争—なし崩しファシズム再編、強化の攻勢との関係で、いくつかの発展段階を辿る。防禦—対峙—反攻の諸段階である。我々が従来述べてきた「敗北的対峙の開始」とはその防禦

から対峙への過程、すなわち三〇年代以降のアジアに於ける一国的、大陸的革命戦争の独自の発展と、六〇年代後半先進国連続権力斗争が、敵の進攻、攻勢に対して、即ちベトナム革命戦争と各国参戦―権力再編に対して、すでに戦略的に呼应し、味方を戦略的に統合しようとする萌芽を内包した闘いを展開したことであり、戦争の目的―共產主義建設の組織性を、党とその陣型の世界的構築としてかちとろうとしている段階にあるということである。従って、戦略的防禦段階の闘いは、すでに、対峙―反攻を準備するものでなければならず、前号でもみた通り、国際武装根拠地建設のみならず、世界党―世界赤軍―世界革命戦線の陣型構築が、対峙段階を確立するメルクマールとなるのである。そして、先進国に於ける戦略の基本的な環は、七〇年代初頭の帝国主義の再度の進攻、攻勢に対する戦術的速決戦―連続蜂起をかちとり、建党―建軍過程から主導権を確立することにある。この七〇年代初頭、とりわけ七二―二年、日本帝国主义の沖縄前進基地化―アジア反革命前線の統合を要とする帝国主義の組織だった。大規模な攻勢に対して、先進国プロレタリア人民が建党―建軍過程による党―軍の指導の下に、具体的には、軍の運動戦―機動戦を中心に反革命軍事体制―帝国主義軍隊解体の戦術的攻勢―蜂起を、敵との攻防過程におけるいくつかの高地―谷間をぬって、連続的にかちとり、帝国主義ブルジョアジーを国際反革命に追

階、世界的には帝国主义の戦線の分裂、味方の部分的な反攻の段階への発展との関連で、遊撃戦の展開を準備するものでなければならぬ。中国での経験が教える様に、世界革命戦争に於いては、遊撃戦が戦略的位置を占める。何故ならば、党―軍の建設―運動戦による主導権の確立―連続蜂起は、すでに先進国プロレタリア人民を、反革命―帝国主義軍隊解体に動員し、組織する政治斗争とし、一体的に展開され、先進国の戦場化から敵・ブルジョワジーの攻勢の物質的、政治的、軍事的、経済的基盤、彼らの中枢かつ広大な後方である市民社会―生産点に於けるプロ・人民の武装―遊撃戦の発展によって対峙段階を形成しうるからである。農民暴動隊―地方赤衛隊の遊撃戦争こそが、赤軍の運動戦―機動戦と戦略的戦術的に呼应し、党―軍―戦線の陣型を拡大、発展させ敵を防禦に追い込んだのであり、この中国の教訓は、先進国における対峙段階にもあてはまる事なのである。防禦段階で、運動戦を主とし、対峙段階では運動戦と遊撃戦が互いに呼应し、正規軍の建設―発展を生みだし、反攻段階では運動戦を主とし、陣地戦が重要な役割をもつてくるという事は、現代帝国主义ブルジョアジーの戦略的優位性をその基盤の脆弱性によって、世界革命戦争の基本的な戦術である。さて、先進国に於いて、労働者国家、後進国革命戦争の発展と戦略的に呼应した防禦段階の闘いは、かくて赤軍の運動戦、政治斗争によるプロ人民の動員、組

いやり、プロレタリア多数派を獲得することを通して、先進国革命戦争の主導権を確立していき、またそれと戦略的、戦術的に呼应して、労働者国家の一層の根拠地国家化が進み、インドシナを始めとする後進国革命戦争が先行して反攻を開始しプロレタリア陣地を拡大していくのが現段階の闘いである。この間、三プロックの戦争は、戦略的に呼应し、統一戦線を形成し、同時に「左翼スターリニズム」「反スタ共産主義―トロッキズム」の止揚に向けた党派斗争を通じて、世界的組織性―党建設をかちとっていくのである。かかる現段階の闘いで先進国革命戦争は何故、軍の運動戦を中心に行われるのか、それは何故、連続蜂起なのか。このことは、文字通り兵力を集中して敵の中枢を攻撃するということのみならず、帝国主義ブルジョアジーの「なし崩しファシズム権力再編、強化」の攻勢が、圧倒的な軍事的、経済的な量を基盤にした反革命陣地構築の陣地戦であり、我々が不断にこの包囲の中で反包囲を、受動の中での主動を獲得するには、全ゆる意味で機動性を持たねばならぬいからである。また、現代帝国主义ブルジョアジーは自らの侵略―反革命の矛盾の故に、我々が組織破防法や首都中枢の彼等の内バリを破って闘う運動戦を展開した時、内外に二つ、あるいはそれ以上の戦線を開かざるを得ず、従って戦略的攻勢の優位性を失っていかざるをえない。この運動戦―機動戦の問題は、明らかに次の先進国に於ける対峙階

級化、即ち遊撃戦の準備―革命戦術に於ける政治活動―軍事―兵站活動の一体的展開をかちとり、敵、帝国主义の新たな攻勢を引きだす。最も集中的に、権力中枢への闘い、蜂起と、各地の政治―軍事―治安部隊との闘いを連続して闘い、敵を殲滅し、戦線を拡大し、敵の戦略的優位性をつき崩していく闘いは、アメリカ、中南米、中近東、アジア、アフリカ、全世界に広がる革命戦争の前進と呼应して、規模を拡大した軍の運動戦と、革命戦線の広範な各地での遊撃戦争の段階に発展し、更に戦略的反攻、即ち、正規による敵軍隊への進攻と勝利した地域でのプロレタリア秩序、革命戦線の全人民的な結成をかちとっていく段階へ進むのである。後進国革命戦争の先行した反攻への進展、労働者国家での社会主義建設の進展と根拠地としての参戦軍建設と一体的に進行する、かかる先進国革命戦争は、こうして現在、先進国のプロレタリア人民、とりわけ日本帝国主义心臓部に於ける人民の真に英雄的な闘い、七二―二年に向けた蜂起を中心とする一連の軍事斗争の開始を敵として前進させなければならないし、また現に一年有余の我が党の苦闘によって前進がかちとられようとしている。沖縄―叛軍―入管諸斗争を、かかる世界革命戦争の環に組織し、機動隊―自衛隊―米軍、治安―検察部隊の殲滅に向けて真剣に軍事を学び、プロレタリア兵士、赤軍兵士として自己を鍛えあげている全同志は、プロレタリア世界革命戦争の根本的問

題を血肉化し、間近に迫った斗いに進まなければならぬ。次に組織戦術の問題に入る前に、我々は自身の総括、前号七号新聞に於ける若干の誤った傾向を総括しておかねばならない。その第一は、「日本武装蜂起斗争」の提起が、世界革命戦争総体の戦略的發展過程、かつ、それを規制している敵、現代帝国主義ブルジョアジーの攻勢、戦略的優位性を分析し、戦略問題から提起する事が不充分であった結果、敵との攻防関係を捨象した主観主義的傾向をつくった事である。一般的に蜂起武装斗争が主張されるのは明らかに誤りであり、七〇年代初頭に向けた帝国主義の進攻、攻勢に対する労働者国家、後進国をして、先進国の三ブロックの革命戦争を戦略的に統合する観点から、歴大な生産力を基盤とする敵の戦略的優位性、だが、侵略―反革命の矛盾、不断に心臓部を反革命陣地として形成しなければならぬ矛盾、すでに我々をはじめとして先進国日本にも革命戦争派の党がある事等を踏まえて、正しく軍の運動戦―革命戦線の遊撃戦争の準備として提起されなければならなかったのである。第二に、その結果、我々は軍事戦術の問題をめぐって、ゲリラ主義を認める誤りをおかした。ゲリラ主義とは「戦略なき戦術主義」の軍事的表現であり、かつて中国共産党内部で右翼日和見主義者から、毛沢東に対して云われた「遊撃戦主義」とは、根本的に異なるものである。ゲリラ戦を提起したゲバラとキューバ革命の教訓は、いまだに

我々の革命的パトスの源泉として我々に脈うっている。が、しかし、教条化したマルクス・レーニン主義に真赤な血を与え、革命戦争を生きたものにしたこのキューバ革命の教訓は、今また決して教条化されるべきではない。ソ連修正主義の「物質的刺戟による社会主義建設」路線と斗い、ロシアのネップ政策に対する批判を展開したゲバラのゲリラ戦争論は、ゲリラ部隊の不断の機動性の確保をもって、敵に対する主導権を確立した。が、帝国主義はキューバ革命の経験から中南米全域グリーンベレーを中心とする強固な反革命軍の下に統括し、各国ゲリラ軍の機動性をその部分一國に閉じ込めた。ペルーを始めとする民族主義軍事政権の登場は、かかる敵の攻撃の結果であり、またマリゲラの言う都市ゲリラは、農村での正規軍建設と結合した戦術として、その戦略的展開に中南米革命戦争戦略を持ち得ない限界を露呈した。我々の六九年敗北、あるいはゲバラの死は、まさしくこうした戦略なき戦術主義、党建設なき戦術主義の限界―止揚の開始であったのであり、世界革命戦争総体に対する一國的、地方的持久戦に止った後進国―労働者国家の斗いの限界と同質のものを持っていたのである。それ故、六〇年代後半の世界的大会戦で敗北した我々は、次の帝国主義の攻勢を前にして、この「戦略なき戦術主義」「党建設なき戦術主義」を根底から止揚する事を問われ、かつその鍵を世界的左派―革命戦争派との統一戦線―党派

斗争を通じて獲得する道として獲得してきたのである。

(4) 統一戦線―党派斗争

すでに、我々は七〇年に於いて連合フンド、戦旗派との党派斗争を開始し、また大衆運動の戦線では京浜安保共闘との初歩的な統一戦線を形成してきた。統一戦線戦術―党派斗争として確定されなければならぬ組織戦術は、世界革命戦争を内包した帝国主義段階に於ける、基本的な党派―潮流の措置からみていかなければならない。第一は、右派―社会民主主義派である。社民は現代帝国主義を構成する一員として、帝国主義的労働運動を形成し、帝国主義の反革命戦争を支持し、自ら産―軍複合体の有機的部分として生産点での反革命別動隊を形成している。第二は、中央派―スターリン主義派である。この修正主義派は、ソ連の世界的な防禦的陣地戦と、先進国での議会主義路線を中心に、世界革命戦争に敵対し、右派と同じく現代帝国主義の一構成部分に転落している。我々はこの現代の右派―中央派を暴力的に解体し、その支配下、影響下にあるプロレタリア人民を世界革命戦争に組織しなければならぬ。第三は、いわゆる左派ブロックを形成している諸派である。人民戦争を闘い、現にアジア大陸や各地で革命戦争を闘っている人民戦争派、ゲリラ戦争を主張し中南米等を中心にして闘っているカストロ主義派、先進国に於いては、世界的持久戦の自然発生性に拜跪し、人民戦争派にのり移った先進国毛派、世界

的持久戦に対するプロ・人民の自然発生性に敵対し、自国帝国主義打倒のみの反スタ教条主義を教条化する先進国中央派（日本では中核・連合フンド、戦旗派等）と、先進国革命戦争を世界革命戦略の獲得、建党―建軍活動の開始から闘うとする我々である。我々は統一戦線の基本線をこの左派諸派との統一戦線を設定し、かつ「左翼スターリン主義」―経験主義的共産主義論、人民戦争論によるスターリン主義の内在的止揚を行いつつある潮流と、依然としてトロツキーの反スタ共産主義に止まり左派ブロックの中央派として、レーニン党建設を教条化しようとする潮流との党派斗争を基盤にこの結合はこの統一党派斗争を基軸にこの統一戦線を發展させねばならない。歴史的なレーニン主義の分解、スターリン主義、トロツキー主義の系譜は、インターの不在、局地的持久戦と速決戦の分裂として現在に至る迄、その傷跡を残している。第三インター、赤軍建設、ロシアの社会主義建設、文化革命等、レーニン主義の基軸は、今「世界革命戦争を内包した現代帝国主義」段階で、プロレタリア人民の党―軍―戦線陣型への組織化を通して發展されねばならない。日本に於いては日本共産党革命左派（京浜安保共闘）、ML派、そして、未だに中間主義者として我々と「戦旗派」の間を動揺し、反戦旗、反日向の野合第三フンド連合を組織した連合フンド「左派」「関西派」等の最も良心的、良質な部分を、不断に「世界革命戦争統一戦線」

に統合し、大衆運動主義、万年決戦論に転落している連合ブンド戦旗派、中核派等を再編してゆく事が、統一戦線戦術の要である。とりわけ、連合ブンド諸派は、口々に第三ブンド建設を叫びつつも、「恒常的武装斗争」(叛軍、革命の軍隊建設、ソヴィエト組織建設)や「武装マッセナスト」によって、帝国主義軍解体への戦略的展望、実は「蜂起」の内実を捨象し、日和見主義路線を後生大事に抱えている。大衆運動主義—学習会啓蒙路線の観念主義、日向派と都市ゲリラ主義、戦略なき戦術主義の左派、関西派は、世界革命戦争の観念化、戦術化では未だ同じ地平に存在している。我々は、すでに開始した連合ブンド、戦旗派との党派斗争を最後迄貫徹し、十年有余の日本階級斗争に於ける「反スタ共産主義」止揚の第一歩を実現していかなくてはならない。六九年ブンドが問われた「党の革命」、その環たる党の軍事化に敵対した所産である「恒常的武装斗争」論によって、中間主義者の面目を保っている左派—関西派ブロックは、基底にさらぎ流の糞つまり帝国主義論—恐慌蜂起論を支持する潮流をかかえ、内部矛盾を深めながら、我々の戦旗派、中核派との党派斗争の進展によって再編されるだろう。七〇年日本階級斗争に於ける、最も不毛な戦略論なき党派斗争を展開した連合ブンド諸派、入管斗争で「反スタ自己批判運動」を展開しだした中核派、整風—整党運動を實踐しつつ、「人民戦争の開始」を路線化し得ないML派、プロレタ

習を進めている。党は、イデオロギー斗争、組織斗争の成果を、世界革命戦争の戦術(軍事、組織戦術)の獲得として定着させ、更に国際活動の強化へ前進している。また、塩見議長をはじめとする獄中の諸同志と我々は、獄中通信等でつながれ、文字通り獄中を革命の学校としている。全国のプロレタリア兄弟諸君、七〇年も一字不明—しい組織戦は、唯一、党—軍—革命戦線の確立、堅持の下に、目前に迫った敵ブルジョワジーの攻勢を打ち砕き、すでに破綻しつつある彼らの戦略的優位性を——二字不明——ずし、世界革命戦争勝利—共産主義建設への前段階連続蜂起へ飛躍させなければならない。この斗いは、正しい戦術、戦術的指導の下で、必ず勝利し、不断に「主導権」を革命戦争の列に押しやる斗いで、同時に多くの長期的な斗いの中の犠牲を覚悟しなければならない斗いである。——六字不明——の三分の一を、世界革命戦争勝利でかざるには決して不可能ではないし、我々はそうするし、組織をあげていかななくてはならない。党—軍—戦線の旗の下、七二年に向けた最初の戦術的決戦—蜂起へ全ゆる力を集中し、組織せよ、

世界革命戦争勝利万才ノ

「1・25蜂起—戦争・武装闘争勝利政治集会」の「集会宣言」は、新聞「赤軍」8号(リーフレット)に転掲載されています。参照して下さい。——編集部

リア文化大革命—日共五一年綱領に依拠しつつ、「都市ゲリラ」米軍基地暴露斗争を主張する京浜安保共斗、——本文不明——を世界革命戦争統一戦線に組織し、来るべき世界帝国主義の攻勢に対して断固として蜂起を貫徹していかねばならない。かかる統一戦線が、すでに「世界革命戦線」——「世界統一革命軍」として世界各地の革命派から提起された国際的統一戦線の一環として組織されなければならない事は、云う迄もない。

(5) 党—軍—革命戦線の旗の下、総力を72年帝国主義の世界的攻勢の環への蜂起へ集中せよノ

全国の労働者、学生、プロレタリア兄弟諸君、我々は以上の如く七〇年世界革命戦争と、わが党の斗いを総括し、総力を七二年に向けた世界帝国主義の攻勢に対決し、勝利し、具体的にわがプロレタリア—人民の戦略的反攻を準備する斗い—とりわけその要たる日本での連続した蜂起—運動戦に集中していく事を提起する。六〇年代の世界的敗北後、幾多のプロレタリアの血を代償に前進しているインドシナ半島や各地での革命戦争に対して、今や我々先進国プロレタリアートは自らの血をもって合流、前進しなければならぬ。すでに、わが革命戦線は、一年有余の斗いの中で、叛軍、入管、地域諸斗争の全ゆる戦線を拡大し、政治斗争—遊撃戦—全ゆる兵站活動を一体的貫徹しつつある。赤軍は隊内での政治工作を重視し、堅持し、同時に軍事学

査証

NO. 3 ¥ 350

- 今回の問題について……………塩見孝也
- 軽井沢銃撃戦と肅清問題の
総括と自己批判のために……………川島 豪
- 長征に出発せよ……………上原敦男
- ベイルート通信……………重信房子
- 兵士のカテキズム……………松田政男
- 現下の革命戦争の党組織問題……………三井次郎

他

1972・4・28 発行